

各関係機関・団体の長 殿（様）

鹿児島県病害虫防除所長

平成19年度技術情報第10号「タバココナジラミバイオタイプQによる  
サイインゲンの着色異常莢（莢の白化症）の発生」について（送付）

平成18年に垂水市と錦江町のサイインゲンほ場で莢の白化症状が確認されました。本症状はタバココナジラミバイオタイプBによって発症することが報告されていましたが、放飼再現試験の結果、バイオタイプQによっても生ずることが明らかになりました。本虫は薬剤抵抗性が強く、莢の白化症を防ぐには栽培初期から防除することが重要なので、防除対策が徹底されるようお願いいたします。

平成19年度 技術情報第10号

1．対象作物 サインゲン

2．対象病害虫 タバココナジラミバイオタイプQ

3．白化莢の発生状況等

- (1) 平成19年1月に錦江町城元の施設栽培の1ほ場（8ほ場調査）で、莢全体が退緑し白化した莢が確認された。葉裏にはタバココナジラミの成虫や幼虫が寄生し、生息密度の高い株に白化莢が多くみられた。
- (2) 上記ほ場ではタバココナジラミバイオタイプQの発生が確認された。
- (3) 垂水市の露地抑制栽培では数年前から白化莢が発生していたとのことであり、平成18年作では特に発生が多く、市場からも指摘されていた。

4．再現試験結果（別紙 表、写真）

タバココナジラミバイオタイプQの寄生により、タバココナジラミバイオタイプBと同様の莢の白化症を生ずることが確認された。

5．対策

- (1) 莢の白化症（被害）を防ぐために、栽培初期からコナジラミの防除に努める。
- (2) タバココナジラミバイオタイプQは薬剤抵抗性が強いので、防除が困難な場合は本虫の発生を疑い、これを対象に防除する。なお、薬剤は平成19年9月11日付け技術情報第9号を参照する。
- (3) 有効薬剤が少ないので、特に施設栽培では防虫ネットの設置や黄色粘着板による捕殺など物理的な防除に努める。
- (4) 薬剤の使用に当たっては、使用回数等の使用基準を厳守する。

## <再現試験の詳細>

### 1 供試作物

- (1) サヤインゲン (品種: ベストクroppキセラ)
- (2) 播種: 平成19年4月19日, 定植: 5月22日 (ポット栽培, ガラス温室内で管理)
- (3) 供試株数: 4 ~ 5 株

### 2 供試虫

タバココナジラミバイオタイプQ (トマトで採集し, ナス苗及びキャベツ苗で累代飼育)

### 3 試験時期

平成19年6月7日から7月27日

### 4 方法

ガラス温室内で開花の始まったサヤインゲンの下位2葉にそれぞれゴース布を被せ, この中に成虫を100頭/株を7日間放飼した。成虫とゴース布を除去した後, 開花結実した莢について白化症の有無を調査した。併せて放飼した葉(3小葉)から1小葉を採集し, 幼虫数を調査した。

無処理のサヤインゲンは上記温室の別室で管理し, サンマイトフロアブル2,000倍を約10日おきに散布した。

なお, 供試したコナジラミのバイオタイプは, 寄生葉から羽化した成虫を用い上田(2005)の簡易識別法により再確認した。

### 4 結果

- (1) 成虫を放飼してから20日後, 幼虫が寄生葉している上位の莢に白化症が認められた(写真1)。
- (2) 莢の白化症は放飼した5株全てに認められ, 25~119頭/小葉の幼虫寄生が確認された。一方, 無処理株では白化症は全く認められなかった(表)。
- (3) 白化症を呈した莢は退緑して全体が白化, 莢の大きさ等は無処理のものと変わらず(写真2), タバココナジラミバイオタイプBにより発生するとされている症状と同様であった。
- (4) 莢の白化症の他に, 茎葉の白化や極端な生育抑制などの症状は認められなかった。

(別紙)

表 タバココナジラミバイオタイプQによる莢の白化症の発生と幼虫数(成虫放飼20日後)

区	供試株数	白化莢			幼虫数 / 小葉 <sup>1)</sup>		
		白化莢発生株数	調査莢数	白化莢数 (%)	最高	最低	平均
放飼区	5	5	56	12 (21)	119	25	64.2
無処理区	4	0	41	0 (0)	-	-	-

1)成虫を放飼した葉。



[写真1] 莢の白化症の発生状況(成虫放飼20日後)



[写真2] 上: 白化症を呈した莢(放飼区)  
下: 莢正常(無処理)